トマス・アクィナス『「魂について」註解』第三巻第六章　試訳

石田隆太・高石憲明

はじめに

本稿は、トマス・アクィナスの『「魂について」註解』第三巻第六章の試訳であり、これ以前の試訳[1]に続くものである。凡例についても前稿を参照されたい。

この第六章においてトマスが想定している議論構造は次の通りである。

【第一段階】四三一　a四〜

知性と感覚の対照。

感覚の運動がどのようなものかを示す。a四〜

知性の運動と感覚の運動の類同化。a八〜

【第二段階】四三一　a八〜

知性の運動と感覚の運動の類同化。

感覚の運動がどのように進行するかを示す。a八〜

知性の運動が同様に進行することを示す。a一四〜

【第三段階】四三一　a一四〜

知性の運動における進行と感覚の運動における進行の類同化。

どのように知性が可感的なものと関わるかを示す。

どのように知性が可感的なものと能動において関わるかを示す。

知性の進行と感覚の進行の類同化。a一四〜

類似の明白化。a一七〜

活動的知性と観照的知性の対照。b一〇〜

知性が可感的なものから分離されているものとどのように関わるかを示す。b一二〜

【第四段階】四三一　a一七〜

知性の進行と感覚の進行における類似の明白化。

「知性的魂には諸表象像が可感的なものどものようにある」について。a一七〜

「善ないし悪を肯定ないし否定する際には、忌避ないし追求する」について。b二〜

【第五段階】四三一b二〜

「善ないし悪を肯定ないし否定する際には、忌避ないし追求する」の明白化。b二〜

【第六段階】四三一b一〇〜

実践的知性の認識と観照的知性の認識の対照。b一〇〜

【第七段階】四三一b一二〜

われわれの知性が可感的なものから分離されているものをどのように知解するかを示す。

可感的質料から抽象された数学的なものをどのように知解するかを示す。b一二〜

存在に即して質料から分離されたものを知解するのか否かを探求する。b一七〜

【第八段階】四三一b一七〜

われわれの知性が諸々の分離実体のうちの或る実体を大きさなら分離されないものとして知解するのか否かを探求する。b一七〜

【全体構造】

知性と感覚の対照。

感覚の運動がどのようなものかを示す。a四〜

知性の運動と感覚の運動の類同化。

感覚の運動がどのように進行するかを示す。a八〜

知性の運動が同様に進行することを示す。

どのように知性が可感的なものと関わるかを示す。

どのように知性が可感的なものと能動において関わるかを示す。

知性の進行と感覚の進行の類同化。a一四〜

類似の明白化。

「知性的魂には諸表象像が可感的なものどものようにある」について。a一七〜

「善ないし悪を肯定ないし否定する際には、忌避ないし追求する」について。b二〜

活動的知性と観照的知性の対照。b一〇〜

知性が可感的なものから分離されているものとどのように関わるかを示す。

可感的質料から抽象された数学的なものをどのように知解するかを示す。b一二〜

存在に即して質料から分離されたものを知解するのか否かを探求する。b一七〜

各議論の詳細については試訳の本文に譲ることにしたい。

なお本稿は、下訳を石田が作成した上で訳者二人が検討を加え

て作成したものである（文責：石田）。

試訳（第三巻　第六章）

【アリストテレスのテクスト】

四三一　a四　さて可感的なものは、可能態に存在する感覚するもの［すなわち感覚能力］から現実態にあるものへと能動しているように思われる。というのも、それは受動せず変質もしないからである。それゆえ、これは運動の別の種である。というのも、運動とは不完全なものの現実態である一方で、端的な現実態、すなわち完全なもののそれは別のものだからである。

四三一　a八　さて、まず感覚することは、ただ言うことや知解することそのものに類似している。ところで、喜ばしいものないし悲しいものがある際には、肯定ないし否定するようにして、追求ないし忌避する。そして喜ぶおよび悲しむということは、そのようなものであるかぎりでの善ないし悪に対して感覚的な中間性によって能動することである。ところでまた、現実態に即しているところの忌避と欲求はこうしたものである。そして欲求するものと忌避するものは、相互とも感覚するものとも別のものではないが、しかし存在は別のものである。

四三一　a一四　さて、知性的魂には諸表象像が可感的なものどものようにある。ところでそれは、善ないし悪を肯定ないし否定する際に、やはり忌避ないし追求する。それゆえ、決して表象像なしに魂は知解しない。

四三一　a一七　実際、空気は瞳をしかじかのものにしたが瞳そのものは他のものをそうするのと同じようにして、聴覚も同様にそうする。そして、最終的なものは一つであり中間性も一つであるがそれにとって存在は複数ある。ところで、どの点で甘いものと熱いものが異なるのかをそれによって判別するところのものは、前にもたしかに言われているが、今も次のように言われるべきである。すなわち、［判別の基準は］一つの或るものであるがそのようにして終極でもあり（これらも比例的なものあるいは数においてあり）、それは甘いものと熱いものが互いに対してそうであるのと同じようにしてその両方に対して一つの有を持つ。というのも［はたして］、非同質のものどもを判断することと、白いものと黒いもののように反対のものどもをそうすることはどれほど異なるのか？　それでは、白いものAが黒いものBに対するようにして、それらが互いに対してそうであるのと同じようにしてGがDに対してあるとしよう。かくして、置換してもそうである。したがって、もしGとDが一つのものの下に存在しているものであるとするなら、それらはAとBもそうであるように存することになり、たしかに同じものではあるが、存在は同じではない。それは前者も同様である。他方で、仮にAが実際に甘いものであるのに対して、Bが白いものであるとしても、比は同じである。

四三一ｂ二　さて、まず知解するものは諸形象を諸表象像において知解する。そして、それらにおいては知解するものにとって模倣可能なものと忌避されるべきものが規定されているのと同様にして、それは、感覚の外であっても諸表象像においてあったなら動かされもする。例えば、火があるということを、それが動かされるのを見ることで忌避されるべきであると感覚する者は、攻撃する者がいるということを共通に［すなわち共通感覚によって］認識する。他方で［知性は］、魂においてある諸表象像ないし知解されたものどもによって或る時に、あたかも見るようにして未来のことごとを現在のことごとに照らして推論し熟慮する。そして、［そうする者が］そこで［すなわち未来で］楽しいことないし悲しいことだと言っていた場合、ここでは［すなわち現在では］忌避するか模倣される。

四三一ｂ一〇　そして行為全般においてそうであり、行為なしのもの、すなわち真偽は、善悪と同じ類にある。だが、端的にそうだということと何らかの点でそうだということにおいて異なる。

四三一ｂ一二　さて、既述の抽象によって知解するというのはちょうど次のような場合のことである。獅子鼻としての獅子鼻を分離した仕方で知解するのではないが、凹んでいるかぎりでの或る獅子鼻を現実態で知解したとしたなら、凹んでいるものがそれにおいてある肉なしに実のところ知解したであろう。そのようにして、それを知解するなら、分離されていない数学的なものどもをあたかも分離されたものであるかのように知解する。ところで全般的に、現実態に即した知性は事物である。

四三一ｂ一七　さて、分離されたものどものうちの或るものをそれは大きさから分離されないで存在していると知解することがありうるのか、あるいはそうでないのかは後で考察されるべきである。

【トマスの註解】

〈四三一ａ四〉「さて可感的なものは、思われる」［*Videtur autem sensibile*］云々。哲学者アリストテレスは、知性についてそれ自体で規定した後で、ここでは知性について感覚との対照によって規定する。そしてこのことをめぐって彼は二つのことを行う。第一に、感覚の運動がどのようであるかを示す。第二に、知性の運動を感覚の運動に類同化させる。それは「さて、まず感覚することは」［*Sentire quidem igitur*］［四三一ａ八］云々という箇所である。

それゆえ、第一に彼が言うことには、「可感的なものは」感覚的部分を「可能態に」おいてあったもの「から現実態に」おいてあるものにしていると「思われる」［*sensibile uidetur actu ex potencia*］。「というのも」、可感的なものが感覚に対して能動するのは、反対のものが自らの反対のものに対するようにして、すなわち感覚を変容および変質させることで感覚から或るものを取

り去るようにしてではなくて、むしろ感覚を可能態から現実態にもたらすようにしてのみであり、そしてまさに彼が続けて言うことには、感覚するものは可感的なものから「受動」も「変質もしない」からである〔*non enim patitur neque alteratur*〕。それは受動と変質が固有に受け取られた場合、すなわち、それが反対のものから反対のものに向かうものであるかぎりでのことである。そして、諸々の物体的事物における、それについて『自然学』で規定されているところの(2)運動は反対のものから反対のものに向かうものであるのだから、明白なことに感覚することは、もしそれが運動と言われるとするなら、それについて『自然学』で規定されているところの運動ではない、「運動の別の種」〔*alia species motus*〕である。その理由は次の通りである。かの運動〔すなわち物体的事物における運動〕は可能態において存在するものの現実態である。なぜならすなわち、動いている間は一方の反対項から退くものが、運動の終極である他方の反対項に達するのではなくて、むしろその反対項に対する可能態においてあるからである。そして、可能態においてあるものはそうしたものであるかぎりすべて不完全であるのだから、そうした「運動は」〔*motus*〕不完全なものの「現実態」〔*actus*〕である。他方で、この運動〔すなわち感覚の運動〕は「完全なものの」〔*perfecti*〕現実態である（というのもそれは、自らの形象によって現実態にすでにあらしめられた感覚の作用だからであり、それというのも、感覚することは現実態に存在する感覚にのみ一致するからである）。そしてそれゆえ、それは自然学的な運動とは「端的に別の」〔*simpliciter alter*〕運動である。そして、感覚すること、意志することという運動は固有には作用と言われる。そしてプラトンによれば(3)、こうした仕方に即して魂は自分自身を動かすのであり、それは自分自身を認識し愛するかぎりでのことである。

〈四三一 a八〉次いで、「さて、まず感覚することは」〔*Sentire quidem igitur*〕と言う際、彼は知性の運動を感覚の運動に類同化させる。そしてこのことめぐって彼は二つのことを行う。第一に、感覚における運動がどのように進行するかを示す。第二に、知性において運動が同様に進行することを示す。それは「さて、知性的魂には」〔*Intellectiue autem anime*〕〔四三一 a一四〕という箇所である。

それゆえ、第一に彼が言うことには、上で〔四二九 a一三〜一八、四二九 b二九〜四三〇 a二〕知性についても言われたように可感的なものは感覚するものを受動や変質なしに現実態にもたらすのだから、既述のことごとから明白なことに、「感覚すること」そのものは知解することに「類似している」〔*sentire est simile*〕。ただしそれは、感覚することだけが、すなわち感覚に即して把捉し判断することだけがある時に、これが「ただ言うことや知解すること」〔*solum dicere et intelligere*〕に類似しているというようにしてである。すなわち、知性が或るものをただ判断し把捉する時

に、それがまさに、感覚の単純把捉および判断が知性の観照に類同化されると言いうる。しかるに、感覚によって喜ばしいないし悲しいと知覚されているものをあたかも「肯定ないし否定する」〔*affirmans aut negans*〕ようにして感覚が「喜ばしいないし悲しい」〔*delectabile aut triste*〕或るものを感覚する時、それは欲求によって追求しているか、すなわち熱望しているか、「あるいは忌避している」〔*aut fugit*〕(そして彼はしるしづけるようにして「肯定ないし否定するようにして」〔« ut affirmans aut negans »〕と言っている。なぜなら、上で〔四三〇 a二六〜b六〕言われたように肯定と否定を形成することは知性に固有であり、しかるに感覚は、或るものを喜ばしいものや悲しいものとして把捉する時にこれに類似した或ることを行うからである)。そして喜ぶおよび悲しむということが何であるかが知られるように、彼が付言することには、「喜ぶおよび悲しむということは感覚的な中間性によって能動することである」〔*delectari et tristari est agere sensitiua medietate*〕。すなわち、感覚的な力の何らかの能動のことであり、それが中間性と言われているのは、例えば中心が自らに向かって終極づけられている諸々の線と対照されるように、共通感覚が何らかの中間として諸々の固有感覚と対照されるかぎりでのことである。ところで、感覚的部分の能動全体が喜んだり悲しんだりすることであるわけではなくて、そうしたものであるかぎりでの善ないし悪との関連にあるものすべてがそうである。というのは、感覚の善、すなわち感覚と適合的なものは喜びを原因する一方で、〔感覚の〕悪、すなわち〔感覚に〕抵触し有害であるものは悲しみを原因するからである。そして悲しんだり喜んだりすることからまさに、「現実態に即して」ある「ところの忌避と欲求」がしたがう〔*fuga et appetitus, que secundum actum*〕。〔欲求とは〕すなわち熱望〔*desiderium*〕のことである。したがって明らかなことに、感覚に対する可感的なものの運動はいわば三段階で進行する。すなわち第一に、可感的なものそのものが一致するものないし有害なものとして把捉される。このことから第二に、喜びないし悲しみがしたがう。そして第三に、熱望ないし忌避がしたがう。そして、欲求することないし忌避することないし感覚することは相異する行為ではあるものの、それらの原理は基体において同じであり、とはいえ理拠においては異なる。そしてこれこそ彼が付言することに、「欲求するものと忌避するものは」〔*appetitiuum et fugitiuum*〕、すなわち忌避し熱望する魂の部分は、「相互とも」感覚的部分「とも」基体において別のものでは「ない」が〔*neque ab inuicem neque a*〕、「しかし存在は別のものである」〔*set esse aliud est*〕。すなわち、理拠において異なる。そしてこうしたことを彼は、欲求するものの器官と感覚するものの器官を身体の別々の部分において措定していたプラトン(4)に反対して言っている。

〈四三一 a一四〉次いで、「さて、知性的魂には」〔*Intellectiue autem anime*〕と言う際、彼は知性における運動の進行を感覚に関して

既述のことに類同化させる。そしてこのことめぐって彼は二つのことを行う。第一に、どのように知性が可感的なものどもと関わるかを示す。第二に、それが可感的なものどもから分離されているものどもとどのように関わるかを示す。それは「さて、既述の抽象によって」〔*Abstractione autem dicta*〕〔四三一 b 一二〕云々という箇所である。第一のことをめぐって彼は二つのことを行う。第一に、どのように知性が可感的なものどもと能動することにおいて関わるかを示す。第二に、活動的知性を観照的知性と対照させる。それは「そして行為全般において」〔*Et omnino in actione*〕〔四三一 b 一〇〕という箇所である。第一のことをめぐって彼は二つのことを行う。第一に、知性の進行を感覚の進行に類同化させる。第二に、類似を明白化する。それは「実際、空気は瞳をと同じようにして」〔*Sicut enim aer pupillam*〕〔四三一 a 一七〕云々という箇所である。

それゆえ、第一に彼が言うことには、「可感的なものどもが」〔*sensibilia*〕感覚に対するようにして「諸表象像は」〔*fantasmata*〕魂の知性的部分と関わっている。それゆえ、感覚が可感的なものどもから動かされるのと同様にして、知性は諸表象像から動かされる。そして、感覚が或るものを喜ばしいないし悲しいものとして把捉する際には〔それを〕追求したり拒否したりするのと同様にして、知性が或るものを「善ないし悪」〔*bonum aut malum*〕であると肯定ないし否定しながら把捉する「際には」〔*cum*〕〔それを〕「忌避ないし」〔*fugit aut*〕追求する。ところで、アリストテレスの語り方そのものからは、感覚と知性の間の二つの差異が注目されるべきである。すなわち〔第一の差異は〕次の通りである。感覚には三つ〔の段階が〕あった。というのは、ここで知性に関してそうであるようには、善ないし悪の把捉から直ちに熱望ないし忌避がしたがっていたのではなく、喜びないし悲しみがしたがっていたのであり、これからさらに熱望や忌避がしたがっていたからである。それの理由は次の通りである。感覚が普遍的な善を把捉しないのと同様にして、感覚的部分の欲求が動かされるのは普遍的な善ないし悪によってではない。むしろそれが動かされるのは、感覚に即して喜ばしいものである任意の規定された善や感覚を悲しませるものである任意の規定された悪によってである。他方で、知性的部分には普遍的な善ないし悪の把捉があるのだから、知性的部分の欲求も把捉された善ないし悪によって直ちに動かされる。第二の差異は、知性について彼はそれが肯定ないし否定すると端的に言っているが、感覚についてはそれがいわば肯定ないし否定すると言っていることである。それの理由は〔本章で〕既述のことごとから明らかである。ところで、言ったことから彼がさらに結論づけることには、もし可感的なものが感覚に対するようにして諸表象像が知性的魂と関わるなら、感覚が可感的なものなしには感覚できないのと同様にして、「魂は表象像なしには」〔*anima sine fantasmate*〕知解できない。

〈四三一 a一七〉次いで、「実際、空気と同じようにして」〔*Sicut enim aer*〕云々と言う際、彼は措定された類似を明白化する。そして第一には、彼が「知性的魂には諸表象像が可感的なものどものようにある」〔« intellectiue anime fantasmata sunt ut sensibilia »〕と言ったことに関してである。第二には、彼が「善ないし悪を肯定ないし否定する際に、忌避ないし」〔« cum bonum aut malum affirmat aut negat, fugit aut »〕追求すると言ったことに関してである。それは「さて、まず諸形象を」〔*Species quidem igitur*〕〔四三一 b二〕云々という箇所である。

それゆえ、第一に彼が言うことには、色によって変化する「空気は瞳をしかじかのものに」する〔*aer pupillam huiusmodi*〕。すなわち、瞳に色の形象を刻印することで瞳を或るものにする。そして「そのものは」〔*ipsa*〕、すなわちそのようにして変化した瞳は、「他のものを」〔*alterum*〕、すなわち共通感覚を変化させるのであり、同様にまた空気によって変化した聴覚は共通感覚を変化させる。そして諸々の外的感覚は複数あるものの、「最終的なもの」〔*ultimum*〕は、すなわちこうした諸感覚の変化がそれへと終極づけられているものは「一つ」〔*unum*〕であり全感覚の間でいわば「一つの中間性」〔*medietas una*〕としてある。それは、あらゆる線がいわば一つの中間に向かうようにしてそれへと終極づけられているところの中心のようである。そして全感覚のそうした中間は、基体においては一つであるものの、「それにとって存在は複数」ある〔*esse ipsi plura*〕。すなわち、それの本質規定は相異する感覚に対して対照されるかぎりで相異化している。そしてこれこそ、「どの点」において「甘いものと熱いもの」が異なるのかを魂が「それによって判別するところのもの」である〔*quo discernit quo dulce et calidum*〕。それについては、そのものについてそれ自体で論じられていた際に〔四二七 a九〜一四〕「前に言われている」〔*dictum est prius*〕のであり、「今も」またそれについては知性との対照によって次のように「言われるべき」である〔*et nunc dicendum*〕。それは、私が言うには終極のように（これこそわれわれが言っていたことである）、あらゆる可感的なものとの関連では「一つの或るものであり」〔*est aliquid unum*〕、「そのようにして」知性「も」あらゆる表象像の「終極」である〔*sic et terminus*〕（そして一つのものから区別されていた複数のものが感覚の側にはあったのと同様にして、「これらも」知性の側には何らかの「比例的なものにおいて」あり〔*et hec in proportionali*〕、それはすなわち可感的なものどもに関して区別する一つのものに比例的に対応しているもののことである。「あるいは」〔*aut*〕また、区別されるものどもの数に関して類似がある）。私が言うには後者の、すなわち知性に属する終極は、「それらが相互に対して」関わっていた「ようにして」〔*sicut illa ad inuicem*〕、すなわち一つの共通感覚が［自らが］判別していた相異する可感的なものと関わっていたようにして、［自らが］判別する「両方に対

して」一つの有として「関わっている」〔*habet ad utrumque*〕。そして、もしわれわれが例えば、まず「非同質のものどもを」〔*non homogenea*〕、すなわち共通感覚がその間で判別する、色の類にある白いものと味の類にある甘いもののように、一つの類には属さない相異する可感的なものを受け取ったとしても、「あるいは」もしわれわれが一つの類に属している「白いものと黒いもののように反対のものども」を受け取ったとしても〔*aut contraria, ut album et nigrum*〕、ちがいはない。なぜなら、共通感覚は両方の間で判別するからである。それゆえ、白いものにはAを黒いものにはBを受け取ることにしよう。すると、GがDに対するようにして、すなわち白いものの表象像が黒いものの表象像に対するようにして、「白いものAが黒いものBに対して」〔*A album ad B nigrum*〕関わることになる。「かくして」〔*quare*〕、置換された比例に即して「も」〔*et*〕BがDに対するようにしてAはGと関わる。すなわち、黒いものが黒いものの表象像に対するようにして白いものは白いものの表象像と関わる。そのようなわけで、知性はGとDと、すなわち白いものと黒いものの表象像と関わるのであり、それは感覚がAとBと、すなわち白いものと黒いものと関わるようにしてである。「したがって、もしGとDが」、すなわち白いものの表象像と黒いものの表象像が「一つのものの下に存在しているもの」である「なら」〔*Si igitur GD existencia uni*〕、すなわち一つの知性によって区別されるなら、それらは「AとBも」、すなわち一つの感覚によって区別されていた白いものと黒いものも「そうであるように存することになる」〔*sic habebunt sicut et AB*〕。それは、この二つを区別する感覚は本質規定においては異なるものの基体においては一つであったというようにしてであり、知性についても同様であることになる。そして、「もし」われわれが非同質のものどもを、すなわち「Aは甘いものであり」そして「Bは白いもの」であるというように受け取る「としても」〔*si A sit dulce B album*〕、「比は同じである」〔*eadem ratio est*〕。

〈四三一 b二〉次いで、「さて、まず諸形象を」〔*Species quidem igitur*〕と言う際、彼は、知性は善ないし悪を肯定ないし否定する際に、［それを］忌避ないし追求すると上で［四三一 a一五～一六］言ったことを明白化する。そして前述のことごとから結論づけることには、知性的魂の部分は「諸形象を諸表象像において知解する」〔*intelligit species in fantasmatibus*〕。「そして、それらにおいては模倣可能な」或るもの「と忌避されるべき」或るものが知性に対して規定されているのと「同様にして」〔*et sicut imitabile et fugiendum in illis*〕、すなわちそれらが可感的なものどもにおいて現前をともなってあったのと同様にして、知性は、それらが「感覚の外で諸表象像において」あった「なら」、すなわち可感的なものどもの不在において諸表象像が表象されるなら、模倣したり忌避したりすることへと「動かされもする」〔*et mouetur cum in fantasmatibus extra sensum*〕。そして彼は両方について実例を措定

する。そして第一は、可感的なものどもの現前へと動かされる場合である。それは人間が、「忌避されるべきである」或るものを、すなわち或る唸り声のような或る恐ろしいものを「感覚する」場合のことである〔*senciens quod fugiendum est*〕。例えば、街で「火が」燃え上がっている「ということを」見て〔*quia ignis*〕、火が動かされるのを「見ることで」〔*uidens*〕、「共通に」、すなわち判別する或る共通の能力によって「認識」するか〔*cognoscit communi*〕、共通に、すなわち一般的に起こるのが常であるものによって、認識する。[共通に認識する内容は]私が言うには「諸々の戦があるということ」〔*quoniam sunt prelia*〕であるか、「攻撃する」或るものがある「ということ」である〔*quoniam inpugnans*〕。そしてそのようにして知性は或る時に、現前する可感的なものによって忌避ないし模倣することへと動かされる。「他方で、魂においてある諸表象像ないし知解されたものども」から「或る時に」知性は、「あたかも」現実態において見るかの「ようにして未来のことごとを現在のことごとに照らして推論し熟慮する」〔*Aliquando autem fantasmatibus aut intellectibus que sunt in anima ratiocinatur et deliberat futura ad presencia tanquam*〕。「そして」〔*et*〕、知性が或るものは「楽しい」ないし「悲しい」ものだと判断する「場合」〔*cum letum triste*〕、「そこでのようにしてここでは」、すなわち現前する可感的なものによって動かされていた時のようにして「忌避するか模倣される」〔*fugit hic aut imitatur ut ibi*〕。

〈四三一ｂ一〇〉次いで、「そして行為全般において」〔*Et omnino in actione*〕と言う際、彼は実践的知性と観照的知性の認識を対照させる。曰く、「真偽は」〔*uerum et falsum*〕、すなわち真および偽の認識は、「行為における」〔*in actione*〕知性に属するもの「と」〔*et*〕、すなわち実践的知性に属するかぎりでのものと、「行為なしの」〔*sine actione*〕知性に属するもの、すなわち観照的知性に属するかぎりでのものとで、その類が善であれ悪であれ、「同じ類にある」〔*est in eodem genere*〕。これは二通りに理解できる。一方の仕方によれば、実践的にであれ観照的にであれ知解された事物は、善であれ悪であれ、事物の観照的ないし実践的に考察されている類のゆえに相異化することはない。他方の仕方で理解できることには、真の認識そのものは観照的知性であれ実践的知性であれそれの何らかの善であり、偽の認識そのものは観照的知性であれ実践的知性であれそれの何らかの悪である。それゆえ彼は、類の一致に即して真偽を善悪と対照させようとしているのではなくて、行為における真偽を行為なしの真偽と対照させようとしている。そしてこれは、彼が続けて言っている差異から明らかである。曰く、「異なる」〔*differt*〕。すなわち、行為におけるものと行為なしのものは、「端的にそうだということと何らかの点でそうだということにおいて」〔*in eo quod simpliciter et quodam*〕異なる。というのは、観照的知性は端的に考察することのできる普遍における或る真ないし偽を考察する一方で、実践的知性は、作用

が個別のものどもにおいてあるがゆえに、作用されうる個別のものに［普遍を］適用することで考察するからである。

〈四三一ｂ一二〉次いで、哲学者アリストテレスは「決して表象像なしに魂は知解しない」［« nequaquam sine fantasmate intelligit anima »］と言っていて、ところで、諸表象像は感覚から受け取られるのだから、「さて、抽象によって」［*Abstractione autem*］と言う際、可感的なものどもから分離されているものどもをわれわれの知性がどのように知解するかを示そうとしている。そしてこのことをめぐって彼は二つのことを行う。第一に、可感的質料から抽象されている数学的なものどもをどのように知解するかを示す。第二に、存在に即して質料から分離されているものどもを知解するのか否かを探求する。それは「さて、ありうるのか」［*Vtrum autem contingat*］［四三一ｂ一七］という箇所である。

第一のことをめぐっては以下のことが考察されるべきである。諸事物において結合されているものどもの一方が他方なしに、しかも真なる仕方で知解されることはありうる。それは、それらの一方が他方の理拠においてないかぎりでのことである。というのも、もしソクラテスが教養深く［musicus］白いとするなら、私は教養［musica］について何も知解せずに白さを知解することができる一方で、動物は人間の理拠においてあるがゆえに、私は動物について何も知解せずに人間を知解することはできないからである。そのようなわけで、事物に即して前述の仕方で結合されているものどもを知性に即して分離しても、虚偽は生じない。他方で、もし知性が結合されているものどもを分離されているものとして知解することで分離したとするなら、それは偽だっただろう。それは例えば、前述の実例において「教養深い者は白くない」［« Musicus non est albus »］と言われるような場合だっただろう。それゆえ、可感的なものどもにおいてあるものを知性が抽象するとはいえ、それらが分離されているのだと知解するのではなくて、それらを知解するのが分離した仕方および独立した仕方による。

そしてこれこそ彼が言うことには、抽象によって知性は「既述の」ものども、すなわち数学的なものどもを「知解する」のであり［*intelligit dicta*］、それは「ちょうど」［*sicut*］次のような仕方によってである。知性が「獅子鼻として」あるかぎりで「の獅子鼻を」知解する場合に［*simum secundum quod simum*］、それは「分離した仕方で」、すなわち獅子鼻を可感的質料から独立した仕方で知解する「のではない」［*non separate*］。なぜなら、可感的質料は、すなわち鼻は獅子鼻の定義に入り込んでいるからである。「そうではないが」、知性が「凹んでいる」ものである「かぎりでの或るものを現実態」において知解する「なら」［*si autem aliquid actu in quantum curuum*］、「凹んでいるものがそれにおいてある」

ところのものである「肉なしに知解したであろう」〔*sine carne intellexit in qua curuum*〕。それは実のところ、凹んでいるものを肉なしに知解するというようにではなくて、肉を知解せずに凹んでいるものを知解したというようにしてであって、これはなぜかといえば、肉は凹んでいるものの定義に措定されていないからである。そして「そのようにして」知性は、あらゆる「数学的なものどもを」分離した仕方で「知解する」〔*sic intelligit mathematica*〕。それらは、存在に即しては「分離されたもの」であるのでは「ない」が〔*non separata*〕、「あたかも分離されたものであるかのように」〔*tanquam si separata*〕である（ところで知性は、自然のものどもをそのように知解しない。なぜなら、自然のものどもの定義には可感的質料が措定される一方で、数学的なものどもの定義には措定されないからである。ただし知性は、自然のものどもに関して類似した仕方で個別から普遍を抽象する。それは、種の定義には入り込まない、個体化をもたらす諸原理なしに種の本性を知解するかぎりでのことである）。そして「全般的に」、現実態においてある「知性は」知解された「事物である」〔*omnino intellectus est res*〕。なぜなら、諸事物が自らの理拠において質料を持ったり持たなかったりする通りにそれらは知性から知覚されるからである。そして抽象のこうしたあり方をプラトンは考察しなかったので、彼は数学的なものどもや諸形象が分離されていると措定せざるをえなかった(5)。彼とはちがってアリストテレスは、前述の抽象をなすために能動知性を措定した。

〈四三一ｂ一七〉「分離されたものどものうちの或るものを」、すなわち諸々の分離実体のうちの或る実体を「大きさから分離されない」ものとしてわれわれの知性が「知解することがありうるのかは後で考察されるべきである」ことになる〔*posterius considerandum utrum contingat non separatum a magnitudine intelligere aliquod separatorum*〕。

実際、この問題はここでは規定されえなかった。なぜなら、或る諸々の分離実体が何であるかもどのようなものであるかもまだ明白ではなかったからである。だからこの問題は形而上学に属するが、アリストテレスによって解決されているのが見出されてはいない。なぜなら、その学を補完するものがわれわれのところにはまだ到来していないからである。あるいは、〔『形而上学』の〕全巻がまだ翻訳されていないからである。あるいは、おそらくは彼が死につかまって完成させなかったからである(6)。

それでも考察されるべきことには、彼がここで言っているように知性は身体の現実態である何らかの魂の能力であるかぎりにおいて身体からは分離されていない。ただし彼は上で〔四二九ｂ五、四三〇ａ一七〕知性は身体から分離されたものだと言っていたが、なぜかというと、知性は自らの作用に割り振られるような

何らの器官も持たないからである(7)。

（いしだ・りゅうた　慶應義塾大学文学部訪問研究員
たかいし・のりあき　木更津工業高等専門学校非常勤講師）

注

(1) 『古典古代学』一一（二〇一九）：一一二五、『倫理学』三五（二〇一九）：一五九–七二、『哲学・思想論集』四五（二〇二〇）：一五九–七二、『倫理学』三六（二〇二〇）：一二七–四一。

(2) アリストテレス『自然学』第三巻第一～五章二〇〇ｂ一二～二〇二ｂ二九。

(3) Cf. アリストテレス『魂について』第一巻第四章四〇八ｂ一～四。

(4) Cf. 同右第一巻第五章四一一ｂ五～六。

(5) Cf. 同右第一巻第二章四〇四ｂ一八～二一。

(6) 後にトマスは『アリストテレス「形而上学」註解』第九巻第一一講において、『魂について』第三巻では疑問が解消されていなかったこの問題について、つまりここでトマスも言及している分離実体（主に天使）を人間知性が知解できるのかという問題について、『形而上学』を見ると解答が示唆されているとする。トマスによれば、「アリストテレスの考えによれば人間知性は諸々の単純実体を知解することに及ぶことができる」（n.1916）と考えている。

(7) 本稿は、ＪＳＰＳ科研費一八Ｋ一二一九一の助成を受けたものである。またこの場を借りて訳者一同、さまざまな学恩に対して伊藤益教授には感謝申し上げたい。